# 二つの「ヒルコ」神話拾遺

大内建彦

## 1　はじめに

偶々、本紀要での三回分の連載を了えたところで、そのつづきを書き継ぐべき別の発表場所を与えられ、「二つの『ヒルコ』神話」というタイトルの下で、序説、本説とたてつづけに二論文を公にする機会に恵まれた。[1] このうち前者の論考では紙数の都合で注および参考文献の部分をすっかりそのまま全部割愛せざるをえなかった。その続編の後者の論でも、先に積み残した注等の補完を論に絡めて組み込もうと企図したものの、これ又別の機関誌であったために、それなりに独立した体裁に仕立てあげる要もあり加えて、又々紙幅の制約もあって、その意図を実現するには至らなかった。そればかりか、論が序説と本説の二本に分かれ発表誌等も違ったため、本来なら序説から本説への橋渡し部分については、重複をいとわず十分に意をつくして本論へとつなげるべく、その前提部分を当然詳述しておくべきところだが、必ずしも十分に周到な目くばりができたとはいい切れぬ憾みを残した。どうしても本論中心の論述展開に終始せざるをえず、ややもすると性急に結論だけをのべたてて先を急ぎ、その論証検証のあり方が十分ではなかったと思われる点も多々あった。論に飛躍があったとは思わないが、少々抽象論に終始し、具体的に委曲を尽して論じきったとはいい切れぬ印象もある。実際、この拙論は序説につづく本説への橋渡しのためのリード部分として書かれたものをベースとしているが、これ又、本論中心の展開上の制約下で大幅にカットせざるを得なかったものである。従って、この小稿は序説から本説へと展開する過程で論じ残したこと、あるいは論証や言及が手薄で不備であったと思われる点や箇所を補足し且つ、注や参考図書の掲出等全体にわたって論を補強し、それをより充実したものにすべく草されたもので、「拾遺」と名づけて掲載する所以である。

さて、本論に立ち入って、これまで述べ来った拙稿の全体的な結論からいえば、『古事記』のヒルコ神話と『日本書紀』のヒルコ神話の二つは、その名義・原義もモチーフもその神話類型も全く異なる別の型式に属する神話であって、そのうちの一要素としての二つのヒルコがたまたま放逐され、あるいは放棄されるというマイナス・イメージ一面を共有していたために、ある種類同のものと見なされあるいは混同されたりする中で、現行テクストにみられるように、表層的にみて一種の類似現象を呈するに至ったものと考えられる。つまり、記紀の二つの「ヒルコ」神話がより本源的に全く異なる二つの神話であることを位置づけるための試論だが、脱稿後、見落としていて目に触れた比較的新しい所論に依拠しつつ、改めて論点の所在を明らかにし論証すべき仮説を明確に提示してみよう。

さて、瀬間正之「ヒルコの変容」なる論考によると、この「ヒルコ」の原義については諸説あるものの、現在のところそれは「ヒルメに対する『ヒルコ』説」と「字義通りの『蛭子』説」との有力二説に大別整理でき、この二つが目下鋭く対立しているという。[2] そして瀬間は岡田精司、次田真幸あるいは吉田修作らの先行論文の主旨にならいつつ、現行「ヒルコ」二説に時間差を設けて、つまり「日子（ひるこ）」から不具児「蛭子」への変容過程を追認している。社会や文化の変化あるいは新しい信仰や宗教の受容に伴って、本来「日子」であったものがいつしか「蛭子」なるものへと零落したとみる、いわゆる変容論的解釈とでも称すべきものだが、類同の表記あるいは類似した扱いをうける二つのものを一つの時間軸の中での変容相として捉えかえし、その乖離あるいは矛盾現象を克服揚棄しようとする論法で、こうしたいささか安直な解釈があちこちで横行している。はなから根本的根源的なものが疑われていない。

瀬間は上述の結論にむけて、ヒルコ伝承を精細に分析した結果確かにそう位置づけうると主張するのだが、この種の類の論の検証のプロセスが往々にして、きわめて表層的部分的なものの解釈に終始するものだったりあるいは、部分的なものを拡大解釈しがちなものだったりして、その論拠がきわめて曖昧で脆弱なものであったりする場合がはなはだ多い。瀬間もその弊をまぬがれていない。

こうした変容論的解釈につくとすれば例えば、この場合だとまず第一にこのキーとなるヒルコ要素を含む本来の神話型の全体がまず招喚され問われなければならない。すなわち、いわば一番肝心のこのヒルコ要素が元々属していた原型（アーキタイプ）としての神話型をまず復元し、その神話型全体のもつ意味あいをしかと確認した上で、改めてこのヒルコ要素をその神話型の中で再考し位置づけるべき基本姿勢が不可欠である。問われるべきは、まずヒルコ要素を含む固有の神話についての厳密な考察であり、何よりもその祖型（アーキタイプ）の抽出にむけての絶えざる関心そのものが必要なのであって、こうした安易な変容論にたやすく陥るのは、神話研究に不可欠のそうした前提となるべき問題意識がきわめて希薄だとの誹りをのがれまい。

ところで、本稿のタイトルそのものが明示するように、稿者は二つ

のヒルコ間に介在する矛盾は一元化できるものとは見ず、全く異なる二つのものが何らかの機縁で同一視同一化されたことによる産果と見るべきことを提唱したい。この「ヒルコ」像の問題は、類似性が伺えるという点から単純に一元化して捉えるべきではなく、二元化して捉えるべきことを神話の祖型にたちかえりつつ確認してみたい。そして改めて、記紀二つのヒルコ神話のそれぞれにおけるヒルコ・モチーフのちがいについて言及しつつ、そのイメージの根本的相違をここに浮き彫りにしてみよう。

こまかな検討検証については上述の拙稿を参照ねがうとして、二つの「ヒルコ」神話の存在を改めて正面きって論じるにあたって、まずその二つの「ヒルコ」神話をより明確に提示する意味も含めて、記紀の神生み条までをも視野に入れ重複をいとわずその析出の論証過程を以下かいつまんで辿り直しておきたい。

稿者にとってはごくごく妥当な推論や結論に思えるものとはいえ、これまでの定説めいたものや従来の知られた仮説や知見をくつがえす試解や試論の類も数多く、勢いテクスト内部からそうしたことに確証を与えるとなると、文脈上精緻な読みとりに加えて微妙な判断なりが厳しく求められよう。従って一つの要素を拡大解釈することなく現行テクスト内での相互要素間に整合性ある解析を加えるとともに、複合し重層する重要諸要素には階層化しつつ多義性を確保すること、そしてそれらが思いつきでなく、妥当性ある緻密な論理的分析に終始基づくものであることに加えて、偏頗偏見に陥ることなく新しい知見を動員しつつ、様々な研究面からも多様に傍証をつみ重ねてゆくことが必要である。前稿脱稿後、新たに見出しえた知見をも加えつつ、二つの異なるヒルコ神話をより確かなものとして浮上させることからまず始めてみよう。

## 2　紀本文型の国生み神話

さて、紀は冒頭から陰陽二神がオノゴロ島を「国中柱」としてそれぞれ左右から「分巡」するとあって、イザナキ・イザナミ二神ではなく、創造主体を急きょ陰陽神に切り換えて登場させている点にまず要注意である。そしてこの二神があらゆる行為行動に先がけて、オノゴロ島なる島自体を「国中柱」としてその周りを左右から旋回するという単純な話型をとることにまず注目したい。以下この神話とも微妙に絡みつつそれを引き継いで、記紀ともに二神の結婚・性交・出産と、大筋では類似の展開をみせるわけだが、記が以下の神話をも含めて、終始一貫キ・ミ二神を主人公として語りつづけるのに対して、オノゴロ島に天降って以降、紀の方は国生みを了え、山川草木を生むまで、つまりつづく日・月神以下三貴子誕生の段になって再びもとのキ・ミ二神に戻すまでの間、このごくごく短い文脈間にかぎって、各異伝ともども全て陰陽二神表記で一貫して通すという特殊な事情が垣間みられるのである。つまり、オノゴロ島での結婚にはじまって大八島を生み了えるほぼ国生み条のみに限って、陰陽二神を主人公としているわ

けだが、何ゆえにこうしたある種小細工が必要であったのか。

その理由の一つには、上述の紀本文型の冒頭の神話が、もともと陰陽二神を主体とし、この二神が宇宙軸としての「天柱」を天地左右に旋回和合し、大地を含めて世界を創成したとするごくシンプルで原理的な神話であったこと、つまりそれは改めて指摘するまでもなく中国伝来の陰陽二元論を基調に宇宙（コスモス）の発生を説く神話であるが、この陰陽五行説等に基づく思弁的な神話型に依拠する形でそのまま陰陽神名を当用したことが考えられる。つまり、この神話の原型を尊重するかぎりで、必然的に残らざるをえぬ要素でもあったということであって、その流れの上で、この陰陽神名が下接のキ・ミ二神の結婚譚にも及んで適用されたものと考えられる。それが第一の理由である。

もう一つの理由とは、ごくごく単純化していえば、先行形態としてのキ・ミ二神の婚姻神話にまつわる兄妹的関係およびそれゆえの出産・初生児の失敗等の特殊な性格を陰陽神のこととして覆うことで、そうした性格を消去しないしは薄めようとしたことが考えられる。すなわち記型のヒルコは紛うことなく文字どおり生み損じとしての初生児であって、従って島生み国生みレヴェルの話とはまずもってつながらないという根本的矛盾があるからである。つまり兄妹婚的なものを払拭し、できるだけ矛盾の伴わないかたちで島生み国生み神話へと転換しようとの意図の下で、陰陽表記にならったと思われるふしがある。紀がその一書ともすべてが天降り以後この陰陽神で統一的に表記されるというあり方は、そうした事情を推察させるに足るものをもっている。論がいささか先どり的になっているが、ヒルコ生み要素をもつキ・ミ二神の婚姻譚がいわゆる洪水兄妹型始祖神話に属するものでしかありえぬことは改めて次節で詳述したい。

ところで、イザナキ・イザナミ対名称の名義解明が目下不十分であるため確信をもって断言はできないが、もとより二神の婚姻譚がより本来的には、陰陽神よりはキ・ミ二神を主人公に語られていたことは確実であろう。ところがつづく日・月神創成条ではその主体はこれまでのキ・ミ二神像とはちがって、俄然天父地母的性格を強く帯びて現象してくるという事情がある。このことはそれまでの神話とこの日・月神等三貴子誕生の神話とがかなり異質な神話であることを自ら露呈させてもいるわけだが、だとすればこの国生みと神生みの二つの神話は、どのような観念でどのような意図でつなげられているのか。キ・ミ二神の神名名義の解釈はまさにそうした二つの神話間の関係をどう解析、処理するかとも深く通底する問題でもあって、そうした点についても追々追求の手を伸ばしてゆきたい。

ところで、紀本文型の「天柱」要素は、オノゴロ島自体を「国中柱」とする点に象徴的に示されているように、どう読みこんでみても、シンボリックな世界軸的性質をおびたものとしてしか読みとれない。しかし記型の「天御柱」にしても注意深くよみとることで、紀の「天柱」との類似的性格らしきものも追認できると思う。つまり不良児型ヒルコの誕生をはさんで、この「天御柱」めぐりの要素があたかも婚姻儀礼に固有のもののごとく反復されているためにいささか見えにく

くなっているが、何をさしおいてもまず「天御柱」を見たてていること、しかも婚礼のための殿舎に先がけて位置づけられていること、そしてこの「天御柱」のまわりを結婚儀礼の一環としてまわることになることからみても、とうてい大黒柱的なものとは思えず、それ自体で自立した存在とみなしうること、そして聖なる「高天原」世界を連想させるかのような「天御」という、これだけに特異な形容がのこることからしても、成婚儀礼に伴う単に祭式的な柱竿といった規模（スケール）にはおさまり切らないコスモロジカルなイメージを彷彿させるものがあること、こうした諸点からみてもこの「天柱」は独立性がつよく、このまわりを回ること自体に特別な創造的意味が存するような、そうした象徴物たる性格を内在させることが確実に読みとりうる。だとすれば、よし仮にこの「天柱」や「天御柱」めぐり要素が一連の二神の婚姻譚に固有のものとみなしうるとして、それでは一体何のために人間大的な二神がこの宇宙的イメージをやどす「天柱」の周りをまわるのか、大きな矛盾があろう。つまりこまかな生活レヴェルの結婚話の中にあって、いささか異質なものとして宙にうくかの感のあるこの「天柱」めぐりのもつ意味説明がつかないだろう。ここには紀本文型の陰陽神の神話と、紀型のキ・ミ二神の婚姻譚の双方とが、そもそも根本的にコスモロジーを異にする神話であることをはっきりと開示しているといえる。こうした諸点からみて、この「天柱」めぐりモチーフは紀の冒頭の神話に固有のもので、それに後接されたキ・ミ二神型の人祖伝承には本来含まれなかった要素と考えてよいと思われる。

ところで、これ以降二神の婚姻譚が具体的にくり広げられる中で、紀において一旦、先の「天柱」めぐりを敢行したあと突如取ってつけたごとき「婦人先唱不祥」なる理由を設けて、もう一度「天柱」旋回をやり直すといった一見不可解な要素がみられる。再三くり返しているように、記においては一度結婚し性交したもののヒルコや淡島といった意に満たぬものが生まれたために、やむをえずもう一度同じことをくり返し、今度は無事淡路島を生んだと伝えており、ヒルコ誕生を中にはさんで全く同一の反復行動として「天御柱」のめぐり直しが位置づけられている。ところが紀本文においては「女人先唱不祥」と、理由づけにおいては記と共通するものの、記のヒルコのごときものの誕生などについては何ら触れぬままに、中途半端ないい訳めいた言葉でただ「天柱」のめぐり直しをもう一度促すのみなのである。

紀の冒頭の「天柱」めぐりのこの抽象的且つ原理的な神話に、もとよりこうしたやり直し要素が付随していたなどということは勿論考えられない。これはこれで単純ながらあくまでも一つの完結した神話なのであって、根強くのこるやり直しあるいはめぐり直しといった要素は、あとからつけ加えられた付加要素であることはいうまでもない。すなわち、紀本文の方に特につけ足し的性格のつよいこの「天柱」のめぐり直し要素は、後接する記のヒルコ型の神話に内在する論理が遡及的に前の神話の中にもち込まれたものとみなしてまちがいない。つまり、原始兄妹としてのキ・ミ二神が生み損じ児ヒルコを産みなし、その負性を克服すべくもう一度一から婚姻儀礼をやり直すというのが

この物語りの祖型に固有の型式であって、このくり返し要素が上接の神話中の「天柱」めぐりにまで波及したために、こういう事態を招来したにちがいないのである。そして、くり返しの行動の下、下接の結婚譚との結びつきを強める中でそれに反比例するかのように、「天柱」めぐり自体のもつより本来的な意味が稀薄化し見失われた。「天柱」めぐりにまつわるこの独立性の強い超時空的、一回性的な意味あいは失われ、あたかも成婚儀礼の中の一コマのそれとみなされるにさえ至っている。「天柱」像はこうした両義性の中で曖昧に揺れつづけているのが実情だが、その一方でこの「天柱」めぐり要素を積極的にキ・ミ二神の結婚譚に固有のものと見なし、この話型内で分析処理する複数の試解も提出されている。つまり、いわゆる西南中国系の伏羲女媧型の神話にみられる「大樹めぐり」の要素にその類似性を見出そうとする見解である。

実は、この型式においては「臼をころがす」というのが普遍的要素であり、この臼はおそらく擬似性交の一象徴でありつつ、近親相姦とその出産に介在するタブー要素を克服するための方途あるいは、それにワン・クッションおくための装置として設けられているものらしい。そうした臼的意味あいを有する行動として、大樹のまわりをめぐるといった要素をもつものはごくごく稀でしかなく、ものの周りをめぐる習俗的なものに普遍型を見出すことは逆にきわめて困難でさえあるのだ。[3] 加えて、このものの周りをめぐる習俗的なものに一種の清めあるいは、タブーの朧化といった意味を認めようとする見解もみられるが、くり返し上述のように稿者は基本的にこの要素はこの神話に固有のものではないとする立場に立っており、そうした分析解釈はこの神話本来のあり方からみていささか逸脱した空論にすぎぬものと考えている。[4] こうした諸点をあわせ考えて、「天柱」旋廻の要素は二神の婚姻儀中の要素ではなく、本来的に陰陽型神話に固有のものであったと論断してまずまちがいないと思う。

ただし、このめぐり直しの理由づけが「女人先唱不祥」とされているが、これが後次的な賢しらによるこじつけであることは改めて指摘するまでもないであろう。従って、神話上他に不都合な要素が見あたらぬ以上、生み損じを将来したことの理由はもともとキ・ミ二神の婚姻関係そのものに胚胎する問題であると考えるほかないのである。そうした問題を含めて、めぐり直し要素にまつわるインセスト・タブーとの関連性といった問題点については、記型のヒルコ神話を相対比し分析する際に改めて触れたいと思う。

以上を要するに、冒頭部の紀本文型のシンボリックな「天柱」めぐりを核とするコズミックな性格の濃厚な神話は、以下でいろいろと具体的に展開する人間大的婚姻譚とは、そもそも位相の異なる相容れぬ神話であって、従って二つの話型を結びつける蝶番の役を担う「天柱」めぐり要素は、前者に本来的なものであって、後者の結婚譚とは本質的に無縁であり分離可能の要素だといえると思う。つまり陰陽二神の「天柱」めぐりの神話は以下の人間的な婚姻譚とはそもそも排他的関係にあること、この点をしかと確認して話を先へと進めよう。

この簡明な神話につづいて記紀両伝とも、愛の言葉の掛け合い、性愛の誘導といった会話主体の叙述をやり直しを含めてくり返すわけだが、上述のように手順等に微妙な差異はあるものの、話の大筋は結婚・性交・出産へとほぼ同じおもむきで収斂している。そして最初の出産の際、記は生み損じとしてのヒルコと淡島の誕生を明確に語るのに対して、紀はそうした点を曖昧にしたまま、まさに間のびした叙述を示している。つまり記紀ともに女人先唱不祥を共通の理由としつつ、記は「然れどもくみどに興して生める子は、水蛭子。この子は葦船に入れて流し去てき。次に淡島を生みき。こも亦、子の例には入れざりき」とするのに対して、一方紀は「産む時に至るに及びて、先ず淡島を以て胞とす。意に快びざる所なり。故、名けて淡路州と曰ふ」とするのである。この異なる二伝に見出しうることは、ともにマイナス・イメージを共有しつつ、記が人祖誕生といった人間的出産にこだわりつつ、胎生型国生みモチーフを同居させているのに対して、紀は人間大的な出産を拒み、大八島に数え上げない初生児淡路島を胞として、次々に生まれる島々を胎児にみたてることで、陰陽二神に巨人神的なイメージを喚起し、ひいてはコズミックな天父地母的性格を彷彿させるものへと転生せしめているといえるであろう。ここには、重なる部分もあるとはいえ、ヒルコ要素の有無をめぐって、片や人祖的なもの、片や島生み的といった意味あいを前面に押し出すことで、記紀間の諸問題が二層的に鋭い対立を示しつつ集約的に浮上しているのである。つまり、紀本文型は記型のヒルコを全くもち出すことなく、初産があったともなかったとも曖昧にしたまま、事後的な形で唐突に「胞」としての淡路島なるものを導き出しているのである。すなわち、上の引用部の淡路島誕生の説明につづいて次に生まれるのが真っ当な本州だとしており、これより以下八島を大八州に数え上げているわけだから、マイナス・イメージを内包する記のヒルコに対応するのは、この淡路州をそれにあてる「胞」でしかないことはいうまでもない。「意に快びざる所」という表現がヒルコ型の生み損じ要素に対応するものなのであろうが、紀がヒルコを排除しヒルコのもつ生み損じ児的人祖的イメージを払拭すべくその代替物として「胞」なるものを想案し、それに淡路島を充てることで島生みイメージを強調しつつ一貫性をもたせ、胎生型の島生みイメージを偽装して全体をアレンジし通していることは明らかである。

つまり紀は「ヒルコ」をモデルにその島レヴェルへの応用形として「胞」を想案し、それによってヒルコを無化しつつこの文脈内から排除し去ることに成功しているわけだが、紀がこのヒルコ要素をここまで徹底して否定してかかるその理由の一つは、この要素が兄妹始祖型に特有のマイナス・イメージを象徴するものであって、大八島という国土の創成になじまぬ要素と見なしたからであろう。かてて加えて、それ以上に積極的な別のもう一つの理由が存しているのだ。すなわち紀本文には、後の神生み条で日・月神に列して生まれ、これ又流しやられる全く別のヒルコが存在しているからである。このヒルコはどの異伝においても決して初生児ではないし、従って記のように単に生み

損じ児であったからといった理由で流されたり、人の数にかぞえ上げられない存在でもない。ヒルコは日・月神とスサノヲといういわゆる記紀体系神話上に冠たる王権を構成する三貴子にはさまれて誕生する、別型式中の重要な神的存在なのである。まずこの出生の位置関係からいって、この二つのヒルコを全く同一のものと見なすことにまず根本的な無理があろう。以上を要するに、紀本文はキ・ミ二神の兄妹関係が不可避的に招く生み損じ要素を払拭し、その産果としてのヒルコを「胞」へと、島生みのための母胎へと変換させて読みかえ、それを更に実在する淡路島に配当することによってこの大八島生みの神話全体を島生みイメージの下に統一し、ヒルコにまつわる兄妹婚等の忌避すべき要素の一掃を図ったのである。その際陰陽二神の「天柱」めぐりのやり直し要素は「胞」誕生の理由づけに転用すべく残存させたのである。ともあれこの根強くのこるやり直しめぐり直し要素は本来的にインセスト・タブーとしての兄妹婚の側に不可避の要素であって、紀本文型はこの点をも含めて、上述してきたように完全に読みかえたのである。重要要素の関連性に細心の注意を払い、克明かつ綿密にそれらを前後すくい上げながら読みとる姿勢に徹するかぎり、紀本文の現行テクストの成立はこのようにしか読めない。

さて、最後にもう一点、紀本文型の陰陽神旋回型の神話のあり方を補強してくれるものとして、大八島の生成順の上に一つの観念が込められているかと思われる点を指摘しておきたい。つまり「天柱」を中心に天空左廻大地右旋することで大地が創成されたと説くわけだが、その島々の生成の順序に注目すると、大地の臍（へそ）たる「胞」＝淡路島を起点に、淡路島→本州→四国→九州→隠岐→佐渡→越（？）へと東から西へ更には北へと時計まわりに、つまり大地右旋の原理に沿って生成されたとしている点が注意される。[5] 松村武雄は、この右廻りを大和を中心にして東から西への政治的文化的社会的波及という当時当局者の地政的認識を重ねて一つの解答を見出そうとしているが、大地右旋という天空とは逆方向の宇宙運行をなぞる性格を示すものとみ、それに島々の生成順が全き対応を示していると見てよければ、この型式の神話の原型を示唆支援する一要素とも見なしえよう。加えてつづく日・月神誕生条に揺曳しているキ・ミ二神の天父地母的性格とも深く相関するかの様相を前倒し的に示そうとしているかに見えて興味深くもある。なおキ・ミ二神と天父地母型との結びつきについては日・月神誕生譚のところで改めてふれることになろうが、一つの試解として示唆にとどめ後考をまちたい。

## 3　記の「ヒルコ」神話

以上のような紀本文型の特徴を記型の方から相対化しておくと以下のごとくとなろう。前節で詳述したように勿論、この記の方の神話も冒頭の陰陽二神の「天柱」めぐり型の神話にキ・ミ二神のいわゆる兄妹始祖型が複合されたものである。ただし、こちらは紀のように陰陽神ではなく最初から一貫してキ・ミ二神を主人公として語られている。

この記型の神話はこの「ヒルコ」誕生要素に象徴的に示されているように、きわめて生活的人間大的な側面を色濃く残している。つまり記型の第一子「ヒルコ」は子には数え上げない文字どおり生み損じの不良児「水蛭子」として、「葦船」に入れて流し棄てられる存在であって、文脈上からみてそれ以外には解しえない。最初から島生み国生みモチーフに徹した神話であったなら、何もこうした要素を残す必要などなかったわけで、人称的名称を島名に必ず付して共存させていること一つをとっても、この型の神話がまさに兄妹始祖型をなぞったものでしかないことを明示している。さらに穿って考えるなら、記は人的イメージあるいは人称名に終始こだわっているが、こうした点からみて、記が宇宙の発生に人類の発生をも重ねてそれをキ・ミ二神に全面的に仮託せんとする意図が存したかとも捉え直せよう。

ところで、くり返し上述してきたように紀本文型は記のこのヒルコをアレンジして、淡路島を「胞」に見たてているが、さてここでついでに、この国生み神話全体を覆っている胎生型なるモチーフにオリジナリティがあるかどうかという点に触れておきたい。「ヒルコ」を「胞」へと読みかえ、胎生型を汎用的になぞり全体を国生みレヴェルに押し上げたとみる稿者は勿論そうした観点には否定的だが、この部分全体の島生み神話化に向けての整合化に与る胎生型の島生みモチーフを、本来的に固有のモチーフとみなす研究者も一方にはいる。(6)

沖縄のアマミキュの神話もこの型に含めていいかも知れないが、いわゆるポリネシア系統のランギとパパ式の島生み神話をその一類型とみなす考え方だが、しかしこの型には本来天地分離をモチーフが分ちがたく結びついている。(7) しかるに、このキ・ミ二神の国生み神話条に限っていうと、ここにはそうした天地分離モチーフは見出しがたいという他ない。そうした神話的観念と全く無縁であったと強弁するつもりはないが、目下のところ繰り返し述べてきたように、陰陽二神が大地を創成した神話に兄妹始祖型が接合複合されたのち、その全体的イメージを整合化する上で、一種弥縫策的な手法として島生みモチーフが前面に持ち出されたものと考えている。

ただこのキ・ミ二神にももう少し先のところで天地分離モチーフならびに天父地母的性格およびそのイメージを明らかに認取しうる側面があることには十分留意したい。すなわち、記型のミ神が火神を生んだために自ら焼き殺された後、黄泉国入りをすることを含めて、その前後で地母神的性格を色濃く示すようになるし、それに対応して妻を亡くしたキ神の方は単独で、日・月・スサノヲ三神を化生したとするように、こちらも天父神天空神としての性格を顕著に示しているからである。つまり、火を媒介に天地が分離し、以後神話展開が天父と地母に大きく二極化しつつそうした対照的性格（コントラスト）を見せるようになる。こうした点を根拠にキ・ミ二神上に天父地母的性格を認めようとする学説もあり、これに賛同する研究者も数多い。

稿者も右のような諸点に関しては一応天父地母的性格を認めてよいと考えるが、ただ先述のようにこの神格を前倒し的に敷衍し、この国生み神話条のキ・ミ二神にまでそうした性格をしかと認める仮説に対

しては留保をつけておきたい。つまり、「胞」要素を本質的なものとみ、そこから逆推的に島生みモチーフを析出するというロジックにはある種倒錯が認められる。あくまでも「胞」は「ヒルコ」の応用形であって、その逆ではないからである。

ところで、紀本文型は記のヒルコをアレンジして淡路島を「胞」と見たてたとすることについては再三くり返すが、世界広しといえども具体的な結婚・性交・失敗譚を伴う胎生型の島生み神話など寡聞にして知らないし、はたまた一つの島を胎盤や胞衣（えな）に見立てて次々に島生みを語る神話など管見のかぎり類をみないといっていい。

さて、紀の「天柱」と記の「天御柱」との類同性については上で詳述したが、とりわけ紀本文型の「天柱」には宇宙の空間成立の契機をなす中心としてのトポスあるいは、その中心軸ともいうべきイメージが認められる。そしてその周りをめぐるという行為は、超越的且つ聖性を帯びた始源としての宇宙の一回こっきりの誕生を物語る神的営為であることをきちんと確認しておきたい。記の「天御柱」の方も、根本的にはそうした方向で理解しうることについては既に上述した。くり返すが、あくまでも「天柱」めぐりは宇宙の始源にかかわる超常現象を不可視でありつつ、可視化して語るためのシンボル装置としてあるのである。

ところで、これも既に上述したことだが、婚姻儀礼のやり直しの理由説明が記紀ともに「女人先唱不祥」にもとめられていたが、この婚姻が「不祥」なる結果をもたらすのは、既述のごとく、キ・ミ二神が兄妹であるという反社会的関係そのものに胚胎し淵源する問題であった。従って、「天柱」めぐりを婚姻儀礼に一環するものとみる見解や、インセスト・タブーの克服を目ざす清めの儀礼といった解釈が本来性を大きく逸脱した二次的解釈でしかないことはもはや明らかであろう。

ここで改めて、このキ・ミ二神の始源型式たる洪水兄妹型始祖神話について詳しく触れておきたい。記の冒頭のキ・ミ二神の結婚とヒルコの誕生およびその流し棄ての要素を目して洪水始祖型の断片とみる見方は第二次大戦中からあった。[8] それをうけて、そもそもこの結婚の前提をなす二人の関係がいかなるものであったかに注目して、この神話を兄妹婚のそれと断じたのは西郷信綱であった。[9] 彼は国語史的な復元研究を援用して「妹（いも）↔夫（せ）」の関係呼称を梃子に、キ・ミ二神の関係が兄妹にほかならずその結婚は不可避のこととして近親相姦という社会的違背を孕みもつものとし、その産果としてのヒルコはタブーの侵犯が将来したある種の贖罪としての流産児的なものと解した。

この西郷説の拠り処とする「妹」表記を文字どおり「妹（いもうと）」と見なしうるとすれば、その痕跡は紀のテクスト内にも見出しうるのである。紀の四―1伝中にたった一箇処ながら「妹は左より巡れ。吾は当に右より巡らふ」として見えているのである。この四―1伝承は記と同工伝承とみられるもので、単純に記の表記にならったまでのこととすればそれまでのことだが、記の伝承中ではこうした会話部分ではすべて、「汝↔我（吾）」という対表現で表記されており、こうした点からみて「妹」表記は極めて異例のことと思える。四―1伝承の当該箇所の

すぐ上の会話中でも「汝」表記がみえているから、この「妹」も「汝」表記に準じた方がむしろ自然でさえあったにもかかわらずそうしていない。西郷の指摘にならって敢て「妹」表記をもち込んでいることに積極的な意義を認めたいのだが、つまり本来の「兄妹」モチーフの不用意な残存相といった性格をここに認取したいのだが、たった一箇所のことでもあり、指摘するにとどめて後考をまちたいと思う。

さてここで、もう一度おさらい的にこの基本型をなぞり直しておけば、このヒルコ要素に象徴されるキ・ミ二神の神話は、ある兄妹が何らかの理由で島などに二人だけでとり残され、この二人が結婚をして始祖となるべきことが宿命づけられているという型式の神話である。そしてこの結婚にはタブーとしてのインセストが不可避に伴い、初産児ヒルコが生み損じ児として産み出される。いわば贖罪の象徴ともいうべきこのヒルコは流し棄てられるべき運命にあるが、記が「葦船」に入れて流し捨てたとするのは、金井清一が説くように、葦によって清め祓うという意識が伴っていたかも知れない。[10] ともあれ、そうした不良児誕生を克服すべくもう一度婚姻儀礼を一からやり直すことによって、目出たく始祖をこの世に生み出しえたことを説く型式がその原型としてあるのである。

このキ・ミ二神による国生み神話中に兄妹型始祖神話が断片化して残存するらしいことの指摘は、上述のように第二次大戦時来にはじまるから、すでにほぼ五十年にわたる研究検証のつみ重ねがあったことになる。近年、伊藤や益田が説得的に説くように、とくに益田勝実が諸説を整理して周到かつ多面的に論拠を駆使して説得的に論じたように、改めてこの国生み神話中に兄妹型の始祖神話が確かな形で潜在していることをはっきりとここに認定すべきだと思う。[11] この延長上にある研究が今日に至るまで、類話採集という地道で根気のいる丹念な作業を伴いつつづけられてきており、わが国においては南西諸島を中心に広く分布し且つ、東南アジア、中国南東郡および南西部とも深いつながりを有する普遍的な説話型とみなされるに至っている。[12]

この種の神話類型の発生因についても、例えば先の伊藤は、近親相姦の相克が人類が自然（カオス）の状態から文化（コスモス）への移行を示すこと、いわばその哲学的表現であって、そしてその禁制という自らの共同体への自縛が人類に宗教的規範を生み法や秩序の形成を斉し促すことに言及している。又、益田はレヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』の成果を援用して、単なる血族結婚の禁止といった従来の消極的理解を脱して、外婚制と表裏するもの、積極的な血の交配の工夫の負的表現とみるべきことも提唱している。稿者はさらにこうした同胞婚的なものの否定、タブー化の裡には、外部とのより広域の人的物的交流、はては労働力の移動拡大といったより開放的な政治・経済・文化といったものの諸々の交流・交通のあるべき姿を、「血」の交流というものに象徴化し理念化したものとも受けとめている。次節以下では、いよいよ本論としてのもう一つの「ヒルコ」神話の実相[13]実態に肉迫してみよう。

**注**

(1) 拙稿「二つの『ヒルコ』神話序説」、戸谷高明編『古代文学の思想と表現』、新典社、二〇〇〇年。同「二つの『ヒルコ』神話本説」、『国文学研究』一三〇集、早大国文学会、二〇〇〇年三月。

(2) 瀬間正之「ヒルコの変容」、古事記学会編『古事記の神々　上』—古事記研究大系5のI、高科書店、一九九八年。

(3) 聞一多・中島みどり訳注『中国神話』(東洋文庫版)、平凡社、一九八九年。

(4) 安田尚道「イザナキ・イザナミの神話とアワの農耕儀礼」、『民族学研究』36巻3号、一九七二年十二月など。

(5) 松村武雄『日本神話の研究　第二巻』培風館、一九五五年。

(6) 松前健『日本神話の新研究』、桜楓社、一九六〇年、など。

(7) 沼澤喜市「天地分るる神話の文化史的背景」、『アカデミア』1巻1号、一九五二年、U・ハルヴァ、田中克彦訳『シャーマニズム』、三省堂、一九七一年、大林太良他『シンポジウム　国生み神話』—シンポジウム　日本の神話1、学生社、一九七二年、鉄井慶紀『中国神話の文化人類学的研究』、平河出版社、一九九〇年、など。

(8) 岡正雄他『日本民族の起源』、平凡社、一九五八年。

(9) 西郷信綱『古事記研究』、未来社、一九七三年。

(10) 金井清一「水蛭子と葦船」、『古典と現代』66号、一九九八年一〇月。

(11) 伊藤清司「沖縄の兄妹婚説話について」、谷川健一編『沖縄学の課題』—叢書わが沖縄第五巻、木耳社、一九七二年、益田勝実『秘儀の島』筑摩書房、一九七六年。

(12) 後出の追補の注(5)参照。最新のものとして、福島秋穂「ヒルコの誕生について」、『古代研究』31号、早稲田古代研究会、一九九八年一月。

(13) ここから(1)の拙稿「二つの『ヒルコ』神話本説」へとつながる。

**追補**　左記(1)〜(5)の注は戸谷高明編『古代文学の思想と表現』(新典社、二〇〇〇年)所収の拙稿「二つの『ヒルコ』神話序説」末尾に本来付されるべきものである。それぞれ注位置を同書中に復元してここに明記し補っておくこととする。(1) 39頁5行目、(2) 47頁10行目、(3) 51頁12行目、(4) 54頁17行目、(5) 57頁10行目。

**注**

(1) 拙稿「記紀神話を読みなおす」(1)〜(3)、『城西大学女子短期大学部紀要』13巻1号・15巻1号・16巻1号、一九九六年一月・一九九八年三月・一九九九年三月。

(2) こうした点に言及する中国学者は数多い。さしずめこの種の観想を抱く研究者に、飯島忠夫『日本上古史論』、中文館書店、一九四七年。白鳥庫吉『神代史の新研究』、岩波書店、一九五四年。出石誠彦『支那神話伝説の研究』(増補改訂版)、中央公論社、一九七三年。広畑輔雄『記紀神話の研究』、風間書房、一九七七年。鉄井慶紀『中国神話の文化人類学的研究』、平河出版社、一九九〇年、などがある。

(3) 安田尚道「イザナキ・イザナミの神話とアワの農耕儀礼」『民族学研究』36巻3号、一九七二年十二月など。

(4) 聞一多・中島みどり訳注『中国神話』(東洋文庫版)、平凡社、一九八九年。山下欣一「南西諸島の兄妹始祖説話をめぐる問題」、『昔話伝説研究』2号、一九七二年四月。谷野典之「女媧・伏羲神話系統考」、『東方学』59輯、一九八〇年一月、同「創世神話にみる雲南貴州少数民族の宇宙観」、『季刊　自然と文化』春季24号、一九八九年三月。陳建憲「中国洪水神話伝説のタイプと分布」、野村純一他編『日中昔話伝承の現在』、勉誠社、一九九六年。

(5) 以上述べてきた洪水型兄妹始祖神話に関する著書論考の類は管見に入っただけでもきわめて数多い。今はその代表的著書を以下に記して、論点の違いなど細部の再検証は今後の課題としておきたい。岡正雄他

『日本民族の起源』、平凡社、一九五八年。松前健『日本神話の新研究』、桜楓社、一九六〇年、同『日本神話と古代生活』、有精堂、一九七〇年。大林太良『日本神話の記源』、角川新書、一九六一年。西田長男『古代文学の周辺』、桜楓社、一九六四年。西郷信綱『古事記研究』、未来社、一九七三年。益田勝実『秘儀の島』、筑摩書房、一九七六年。伊藤清司『日本神話と中国神話』、学生社、一九七九年。福島秋穂『記紀神話伝説の研究』、六興出版、一九八八年。福田晃『南島説話の研究』、法大出版局、一九九二年、など。